

ものがたり
慈濟

ツーチー 2021年7月 295





●扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黃筱哲

防疫には齋戒しがなく、 世に入って仏法を實踐する

疫病が蔓延し、世界が災いから抜け出せずにいる中、
敬虔に齋戒し、菜食して衆生を護るべきです。

六度万行でこの世と人心を救い、
群衆に分け入って、苦難を取り除くのです。

表紙



4月9日、静思精舎の尼僧たちが先頭に立って、100人近いボランティアが敬虔に朝山活動（3歩毎に五体投地する礼拝）を行った。今年には慈済の55周年にあたり、3月からボランティアや会員が続々と花蓮の精舎に帰っては朝山活動を行って、互いの奉仕に感謝し、世のために祈った。（撮影・蕭耀華）



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
至誠の愛

善耕／訳
4

【主題報道・慈済の55年】

善を受け継ぐ私たちはここにいます！

御山凜／訳
8

伝承と超越

慈願／訳
16

ボランティアが毎日忙しいわけ

葉美娥／訳
22

もう一度慈済を認識しよう

有田夏子／訳
30

愛の奇跡 一元の力
小さな寄付が大きな慈善の力になる

有田夏子／訳
46

【特別報道・台鉄事故】

花蓮に愛を注ぐ時

田中亚依／訳
50

【證嚴法師のお諭し】

敬虔に齋戒して、危機を乗り越える

慈願／訳
60

【世界に目を向ける】

ミヤンマー／タイ

高雪白&明彤&明陞／訳
66

【国際慈善】

国際的なプラットフォームに繋がり、
善がさざ波のように広がった

心嫻／訳
76

【親と子と教師、三者の本音】

生活は最高の良師

常樸／訳
92

【百の流れは海へと帰る】

無数の足跡

明漚／訳
96

【行脚の軌跡】

真心から出た言葉

済運／訳
100

六月の出来事

済運／訳
106

至誠の愛

清明節（台湾では先祖の墓参りをする）の四連休初日、一台の作業用車両が花蓮県清水トンネル手前の線路上に落下し、特急タロコ号は急ブレーキをかけたが、間に合わず、衝突して脱線した。台湾鉄道史六十年において最多の死傷者を出す惨事となり、国内外に衝撃を与えた。

花蓮慈濟病院は直ちに「レッド九号」（重大事故発生による緊急体制）を発動し、医療スタッフは救助のために現場に駆けつけ、慈濟ボランティアは食糧や飲料水などの補給で後方支援し、負傷者への治療の付き添いや犠牲者家族への寄り添いを行い、後続の慈善ケアも発動した。

證嚴法師は「今回の禍は、人々に悲しみをもたらしましたが、乗客が互いに助け合って困難な状況から脱出したり、社会各方面からも心温まる声援が

届いたりして、輝く人間性の美しさを見せてくれました」と言った。また、法師は慰問の手紙で全世界の慈濟人からの至誠と愛を伝え、犠牲者の魂が安らかになり、生存者の心が落ち着くよう願った。

慈濟は創設から満五十五周年を迎える。今回の緊急災害支援で、苦難の人に寄り添う初志は、過去の経験の蓄積のおかげで、今まで通り支援活動ができた。慈濟人は再び生命の無常を体得したことで、当然のこととして「今」を把握して奉仕したのである。

今月号の主題報道のテーマは「慈濟の未来への展望」である。この半世紀の歩みの後で、絶え間ない社会の変化を見据え、どのような挑戦が待ち受けているのかを問いかけている。高齢化と少子化社会の人口構成の下で、慈濟ボランティアも徐々に高齢化しているため、如何にして次世代に伝承し、永續発展させるべきか、そして、どのようにして社会ともっと頻繁にコミュニ

ケーションを取り、大衆により慈済を理解してもらうことができるか、といった重要な課題について述べている。

近年来、慈済基金会は組織の活性化と改革を進めてきた。二〇一六年からは、基金会の志業運営に関するあらゆる種類の情報をガラス張りにするため、「企業の社会的責任報告書」(CSR Report)を発行しており、二年に一回更新されている。その報告書は元々、商業活動をする組織が社会的責任を果たすことを目的としたもので、非営利組織は政府から義務付けられていない。慈済は社会から信頼を得るために、会計事務所に依頼し、社会的投資収益率(SROI)を出してもらおうと共に、第三者の認証を取得して、慈善活動の成果を数値化することで、一般大衆でも一目瞭然にしている。

第一線のボランティアにとつて、次世代との価値観の相違に遭遇すること

は避けられないが、彼らは親のような優しさと忍耐でもって包容している。「慈済家族」出身の二代目ボランティアでさえ抵抗することもある。それが往々にして自身の人生で苦を味わった時に、慈済人の寄り添いと無条件の愛が、彼らの頑なな心の壁を取り払っていくのだ。

證嚴法師は、慈済の活動だけできて、宗教的情操や修行心が不足していれば、慈済はただの一般的な社会団体に過ぎない、と繰り返し念を押している。宗教的な修行とは、狭義的な宗派の区別や教義の定義をすることではなく、宗派や名を超越して、区別することなく、苦難者に至誠の愛を奉仕することである。仏陀の「無縁大慈、同体大悲」に源を発する精神こそが、慈済が着実に人間(じんかん)菩薩道を歩み続ける核心なのである。

(慈済月刊六五四期より)

私たちはここにいます！

文・廖哲民 訳・御山凜

「ただ良いことをしたいだけなのに、どうして慈済についてたくさん知らないといけないの?」
 このような疑問に対し、若い世代の慈済ボランティアは「言われたことを聞くだけ」という風
 潮を変えて、新しいことを始めようとしている。
 良いことを分かち合うとさらに温かさが加わり、生活に溶け込ませて優しくさを感じてもらえ
 れば、人々にもっと慈済に興味を持ってもらうことができる。それは、年長の慈済人が若い人
 を誘う秘訣でもあり、それが愛なのである。



慈

ボランティアという人的資源は、慈済に始まり、台湾の重要且つ貴重な無形資産とまで言える。というのも、彼らの無私な奉仕、緊急災害支援、長期的な貧困救済、教育支援、医療体制整備、リサイクル活動などは、慈済の志業である故に運営を維持できているのだ。各領域に携わる人が集まり、専門を活かした経験と人生の智慧を貢献し、独特の「慈済人」という人柄を生み出している。

行政院国家發展委員会が二〇二〇年に発表した人口推移報告によれば、二〇二五年には台湾は「超高齢化社会」

共善勉強会」で、慈済慈善志業の顔博文執行長は、企業、宗教団体または他の組織のどれであろうと、今、その持続可能性が問題になっているが、時代の変化に伴って、組織が臨機応変になつてこそ、社会に対して持続する影響力を発揮することができるのだ、と言った。

顔氏は、組織の永続は時代の変化に適応する必要があると強調し、隠し立てすることなくこう言った。

「慈済も今社会の高齢化と少子化で、まず組織の永続が問題になります。避けて通れないのが団体による伝承と引き継ぎ及び若い人の参加への呼びかけです」。

に突入する。言い換えれば、五人に一人が六十五歳以上の高齢者ということになる。台湾の慈済ボランティアの六割以上は六十歳を超えており、既に高齢者になっているか、またはもう直ぐ高齢者の仲間入りをする彼らは、依然として第一線で奉仕している。例えば、エコ活動やコミュニティ活動、さらに自分と同じかより若い年齢の社会的弱者のケアを行っている。

社会環境の移り変わりに伴って、人口の年齢構成が変化し、組織の活性化も慈済の課題となっている。今年三月に慈済花蓮本部で開かれた「第一回グローバル

寄り添った時に希望が見えた

伝承と言っても、一体何を伝承するのか？簡単に言うと、善の精神とその行動力を受け継いでいくことである。この半世紀のように、台湾で事故や災害があれば、慈済人はいつでも「先頭を歩き、最後までやり遂げる」のである。また、地域で貧困者支援を中長期的に行う時に、諸々の困難や挫折に直面しても、くじけずに忍耐を持ってやり続ける精神は、若い世代からも認められている。

隠し立てするには及ばないが、引き継ぎをする際の困難は、世代間の「ギャップ」

である。同じことでも、考え方とやり方が違ってくる。

大学時代から慈青サークルに参加していた、慈済の若い世代の林彦廷（リン・イエンティン）さんと陳立芳（チェン・リーファン）さんは、先輩たちが人脈を頼ってボランティア活動を宣伝していたのとは違い、ソーシャルメディアを通じて人々に呼びかけ、またパソコンソフトを駆使して図やグラフ、ビデオを作成している。また一般的な講演方式で環境保全や慈善活動についての考え方を広める一方、様々な活動を企画し、話題を提供して創作することで、ネットに慣れている世界の若い

世代の興味を惹きつけて実際に体験してもらい、オンラインでも実社会でも一緒に参加することを呼びかけている。

「勇気を持ってどんなこともやってみないと分からない。やってみたら、全然違うかもしれない」。板橋のボランティア、陳廉忻（チェン・リエンシン）さんは、母親という角度で自分の考えに執着することなく、見た目からして「カッコよく」て、テクノロジーに詳しい若者から知識を得るようにしている。一緒にやっていく中で、意見の違いや衝突があるかもしれないが、温かいコミュニケーションを取って寄り添う中で距離感をな



くしてきた。

五十五年間、多くの慈済ボランティア家庭の「二代目慈済人」は、一体どのようなようにして一代目の経験と智慧を汲み取っているのか。

父親の潘機利（パン・ジーリー）さんと前後して慈済に参加し、今は真善美（記録）ボランティア窓口を担当している潘耕美（パン・ゴンメイ）

●慈済青年部の陳立芳さん（左）、林彦廷さん、懿徳ママ（学生の相談相手）の陳廉忻さんの3人はいつも集まって、一緒に学んでいる。（撮影・蕭耀華）



慈済大家族 お年寄りを支え、 若者を迎え入れることが必要

♥ 慈済が無から有になったのは、ベテラン慈済人が少しずつ愛を結集して、道を切り開いて来たからです。それで今、私たちはこのように広い道を歩むことができます。

♥ 若者は将来の社会の主軸として、責任と使命を担わなければなりません。

♥ 次世代に対しては励まして寄り添うべきであり、歳を取ったから全部若い人にやらせるのではなく、怠けず、精進し続けなければなりません。

♥ 歳を取っても、自分を奮い立たせ、他人と自分のために奉仕できる機会を大切にすべきです。

♥ 若い人がお年寄りの誠意のある奉仕と勤勉で怠けない精神に学んで、長く慈済に投入することができれば、志業は代々永続的に引き継がれるでしょう。

♥ 貴重な慈済の歴史は、多くの慈済人が人生の一分一秒を積み重ねたものです。慈済の歴史には、大勢の人生の足跡があり、それは皆の人生の歴史そのものです。

♥ お年寄りを支え、若い人を迎え入れることで、人間（じんかん）の大愛は代々受け継がれます。

(引用『證嚴上人納履足跡』より)

さんは、シニアボランティアを見て、「もうおじいちゃんやおばあちゃんの歳になられて、体もどこか不具合を抱えていますが、機会がある限り喜んで奉仕し、どんなことでも学ぼうとするのですよ。例えば、撮影やパソコンの操作など、新しいことに積極的に取り組んでくれて、私たち若い人よりもパワーがあるのです！」と言った。

ボランティアをする過程で、喜びもあれば困難に出会うこともあり、思うようにいかない時にはプレッシャーを感じるものだ。ずっと寄り添ってきた父親の潘さんが過去の経験を話してくれた。「困

難は克服しなければならいが、困難に克服されてはいけない」と。父親の世代と次の世代が慈済に入った状況は違っても、お互いに学び、友人のように学び合えれば良いと思っているようだ。

いつの時代も変わらない、やるべきこととは慈善活動であり、伝承と継承は矛盾しない。二世代の「慈済人」家族と懿徳媽媽が慈青（慈済青年部）と話をする時は、お互いに相手の善意を大切にし、長所を讃え合えばいい。心が向かう方向は集約することができ、誠意のある「寄り添い」は距離を近づけてくれる。

(慈済月刊六五四期より)

慈済志業は、一日に五十銭を貯金して困難の克服を支援するという「竹筒歲月」の習慣を、花蓮を起点として始めたことに由来している。台湾全土から全世界への道は起伏に富み、苦難を伴ったが、シニアボランティアたちは力を合わせて切り開いた。変化する世界情勢の中で、後続の人は依然として薄氷を踏む思いでいるようだ。あの一年、あの一念を伝承して、人々の善意の心を啓発し、代々にわたって愛のエネルギーを永續させ、次の五十五年に向かって邁進するのみである。



● 仏教克難慈済功德会の設立から三年の間は、変わらず普明寺に仮住まいをして各種慈善活動を行っていた。それを知った證嚴法師の俗世の母親、王沈月桂さんは、資金を出して土地を購入した。15カ月の工期を経た1969年5月10日、新城郷康樂村に静思精舎が落成した。

(写真の提供・花蓮本部)



世界に広まった竹筒歳月の習慣 慈善パワーは皆の力

上：慈済功德会設立初期の法師と慈済人。普明寺にて。この善意溢れる女性たちは訪問ケアをして貧困者の救済を行うため、募金をして人助けをしようと思いついた。日々の食事代から50銭を貯金する「竹筒歳月」を始めた。今日までの積み重ねは少しずつ結集し、小銭は大善を成すと言われる通り、慈済の慈善支援とケアの足跡として120余りの国に及んでいる。（写真提供・花蓮本部）

左：2008年、慈済はミャンマーの農民、烏関寿（ウー・ミン・ソー）さんに種籾を贈った。彼は竹筒歳月を模して「一日一握りの米」貯金を始めた。彼の娘さんが毎日、白米を炊く前に一握りの米を容器に入れ、いっぱいになるとそれを寄付するというものだ。今ではミャンマー全国の「米貯金」会員が毎月2万3千キロもの白米を貧困者に贈っている。

（撮影・蕭耀華）

口伝えで伝える慈濟、 困難を克服する精神が脈々と 継がれている

初期の静思精舎の周りは見渡す限りの水田だったので、尼僧たちが外部と連絡する時には自転車で向かいの村に行って公衆電話を使っていた。また、慈濟人は手紙を送ったり、徒歩で精舎に出向いたりして志業について話し合っていた。それを見て、鄭柏（ジョン・ポー）さんという師兄が18カ月のサラリーを注ぎ込み、大通りから精舎までの道に電信柱を立てて電話線を通したので、やっと精舎に最初の電話機が取り付けられた。

（写真の提供・花蓮本部）



慈濟はアフリカのエスワティニでINGO（国際非政府組織）の登録をした。志業の源は9年前に南アフリカのボランティアが国境を越えて指導したことに始まる。今日に至っても、通信技術に無縁な地域では「口伝え」で慈濟の話をしなくてはならない。慈濟はアフリカ南部の9カ国に1万人余りの現地ボランティアを有するが、彼らは交通不便で不案内な他国を徒歩で訪れ、慈濟精神を広めるために至る所で慈濟の話をしている。

（撮影・蕭耀華）

（慈濟月刊六五四期より）



もう一度慈濟を認識しよう

文・陳麗安 訳・葉美娥
撮影・黄筱哲

「正しいことは、やれば間違いありません」。
「慈濟人は『辛い』とは言わず、『幸せです』と言います」。
「言葉の限り、慈濟世界を創設した證嚴法師に感謝します」。
慈濟人との対談で受け答える時、いつもこの三つの言葉が出てくる。
彼らボランティアは、出勤の時間は決まっていないし、街の至る所で人助けをする上に、助けた相手にありがとうと言う。このような善行が理解し難いのなら、他人からいろいろ聞くよりも、直接、彼らの自己紹介と行動内容を聞いた方が早い。



五

十五年前に遡ると、当時は人心が素朴な時代だったと言える。「仏教克难慈済功德会」はそんな頃に花蓮に設立された。当時台湾の人口は一千二百万人ほどで、貧困者の割合が十パーセントを超えていた。社会福祉制度も完備されておらず、慈済に賛同する専業主婦が毎日市場へ行く前に五十銭を貯めて慈善基金とし、その善行への参加を広く呼びかけたことから、救済の歩みが始まった。

一歩ずつ歩んで二〇二一年に至り、慈済の足跡は台湾全土だけでなく、全世界に広まった。救済という慈善志業以外、

医療志業、教育志業、人文志業にまで徐々に歩みを広げ、更に造血幹細胞寄贈、環境保全、国際災害支援及び地域ボランティア組織の整備にも力を注いでいる。

雑誌「天下」が二〇〇一年に台湾の人々を対象にして行った「美感大調査」というアンケートでは、台湾で最も美しい人物は「證嚴法師」で、二番目は「慈済人」であるという結果が出た。

その調査から二十年が経ち、社会は発展し、世代が代わった今、まだ多くの人々が、「慈済」という名は聞いたことがあっても理解しているとは限らず、逆に全く

知らない人や好奇心だけで見ている人も少なくない。それと同時に、科学技術の発達した現代では、多くの不可解な点や疑問がネットで拡散されている。

社会福祉資源が多い現代において、慈済に何か特別な利点があるのですか？

「人」の字を思わせる独特の屋根を持つ「静思堂」は、お寺なのででしょうか？
リサイクル活動は、ゴミ拾いで生計を立てている貧しい人たちの収入を圧迫し

ていませんか？

慈済骨髓幹細胞センターは、なぜ患者に費用の分担を求めるのですか？

身の周りにいる目立たない人たち

一つ一つの問題を携えて、私は慈済の活動現場に行き、各領域の古参ボランティアを取材した。彼らが行っている活動の中から答えを見つけ、なぜ全力投入

慈済は花蓮に始まり、世界に広まった。

55年来の活動で、慈済は今、66の国と地域に拠点を置いており、

慈善ケアの足跡は122の国と地域に及んでいる。(2021年4月統計)

しているのかを聞かせてもらった。

花蓮では慈済大学教育棟九階骨髓幹細胞センターを訪ねた。そこに教室を改造した実験室があり、精密な検査や鑑定を行う測定器や、血液サンプルを冷蔵する設備が置いてある中で、スタッフは静かだが忙しく働いていた。ため息まじりに話してくれたのは、多くの人が造血幹細胞寄贈の過程を理解しておらず、一般の献血と同じように簡単だと思っていることだそう。しかし、血液サンプル検査用の試薬だけでも、一ロットが二千万円（約七千万円）以上もかかるのだ。この二十数年来、データベース設備を運用し

る。人を救うという大事において、どれだけの人がネットの情報の真偽を確かめているか定かではないのは、とても遺憾である。

台北市松山区のある小さなシャッターの門の横に、もしも幾つもの回収かごが置かれていなかったら、そのきれいに整理された門の前がリサイクル拠点だとは誰も気が付かないだろう。朝八時前には既に近所のおじさんやおばさん、おじいちゃん、おばあちゃんたちが集まり、シャッターが上がると同時に、皆、自動的に担当区域に行き、回収物の分別を始める。その中にはビニール袋やガラス瓶

続けるだけでも大きな負担がのしかかっているが、年間数千人のマッチングを求める全世界の血液疾患患者に生きる希望を持って欲しいので、困難でも持続して運営しているのである。

ネット上で流れている誤解に対して、各地の骨髓移植ケアチームのボランティアは、依然として街頭で骨髓寄贈登録の宣伝に努める傍ら、マッチングしたドナーが見つかるとう居場所を探し、一分一秒を争って会いに行く。しかし、間違った情報の影響力は極めて大きく、ドナーになる意思を覆す人もおり、患者さんが治療を受けるチャンスが少なくなっている

のような、回収業者が歓迎しないような手間暇が掛かるものも少なくない。お年寄りたちは世間話をしながら、ときばきと動いていた。「環境保全の理念が分かる上に、リサイクル活動で多くの人と触れ合うことができるので、ここに来るのが大好きなのです」とあるおばあちゃんは笑顔で私に言った。

新北市にある浮洲橋の近くの板橋静思堂にやって来た。静思堂の外見は荘厳だが、実は喜びに溢れた建物だと、長年に亘ってコミュニティ事務に携わってきたボランティアが言った。そこは災害が発生すると避難所になり、普段は趣味や



慈済ボランティアは 自己負担で奉仕する

- ♥ 台湾の弱者家庭への支援は、社会救済総支出で占める割合が**最も高い**。
- ♥ 事故や災害現場に**真っ先に駆けつけ、最後まで寄り添う**。
- ♥ 教育は待てない。2020年の就学助成金対象者は延べ18,401人、学習と成長ケア対象の児童は延べ12万人に上る。
 - ♥ マッチングした造血幹細胞ドナーの説得に**根気強く取り組む**。
- ♥ リサイクル福祉用具は必要とする人に**無料**で提供する。
 - ♥ 台湾全土で寄り添う受刑者や前科のある人の数は、年間延べ15万人に達している。
 - ♥ コミュニティーの高齢者のために、**無料**で住まいの安全点検とバリアフリー化を提供している。
- ♥ 新型コロナウイルスの感染期間中、23万個の布マスクを作成し、国内外の防疫に協力した。
 - ♥ **深夜に**、路上生活者に冬物の**配付を行っている**。
- ♥ **医療スタッフは休暇をとって交通費を自己負担し**、偏境や外国人労働者への施療を行なっている。
- ♥ コロナ禍の期間中、**90**の国と地域に感染防止物資を送った。

実用的な生活講座が開かれ、また、人口構成の変化に伴って、高齢者介護の拠点になったり、シニア教養講座の会場となったりして、上手に利用されている。慈済五十五周年というテーマ報道の取材中に、私は善行の初心に立ち返るべきだと気が付いた。私たちの周りに普通に存在している慈済ボランティアたちは、考え方が非常に純粹で、長年頭を下げて黙々と奉仕している。だから、外部からの問い合わせに対し、「私にも言わせてもらいたい！」と自分の気持ちを伝えたのだ。

あるボランティアは次のように言っ

た。人間（じんかん）では意見の食い違いは避けられないが、誤解されても賛同されても、認められても喜ばれても、いずれにしろ、彼らは人を愛して人助けする信念を貫き通し、互いに感謝の気持ちを持ち続けているので、社会はもつとよくなると思っているのだという。それは、「正しいことであれば、やれば間違いない」と信じる単純な一念だ。

（慈済月刊六五四期より）

愛の奇跡 一元の力

一般大衆の慈済ボランティアに対する印象は、「人数が多い」、「動員が速い」、「熱心に善行する」、「費用を自己負担し、休暇をとって活動に参加する」である。だが、それらの形容詞を目に見える数字で表すことはできるのだろうか？ 慈済に寄付された台湾ドル一元は、どれほどの影響力を生み出しているのだろうか？ 『慈済の永続報告書（CSRレポート）』がその問いに答えてくれる。



●2020年末、台風22号（アジア名：ヴァムコー）の被害を受けたフィリピンの災害慰問金の配付会場で、寄付金を受け取った被災者が愛の恩返しとして、更に人助けをする募金集めを行った。50数年前、證嚴法師が主婦たちに1日50銭の寄付を呼び掛けた「竹筒歲月」。小額のお金で大きな善を為す模式が国境を超えて広がっている。

（撮影・郭嘉傑）

師

姐（スージエ）、一日に何時間リサイクル活動を行っていますか？」。「ここ板橋静思堂で、安侯永統発展顧問会社の葉怡秀（イエ・イーシウ）マネジャーが膝を曲げ、八ページにおよぶアンケートを片手に、北京語と台湾語を交えながら一問一問丁寧に質問していた。その答えに、板橋静思堂 S R O I プロジェクトチームのメンバーは驚いた。

年配のボランティアは、毎朝五時にリサイクルセンターで「法の香りに浸る」お諭しを聞き、その後朝食を済ませ、そのまま正午までリサイクル活動を行い、昼食後はまた夜の七〜八時まで活動を続

けると答えた。「帰る時間は自分の気持ち次第です。十分にできたと思ったら帰ります」と笑って答える人もいた。旧正月にはリサイクル資源の回収量が急増して山のように積み上がるため、彼らも「残業」する。休日は特に忙しい。

プロジェクトチームが作成した社会的投資収益率 (Social Return on Investment: S R O I) のアンケートは、国際認証の規範に基づいて作成されているため、一人一日あたりの時間数は最大八時間までしか算入することができない。『CSR報告書』の分析編集を担当している葉マネジャーは、ボランティ

アたちから寄せられる「私のしたことは、全部記録してくださいね!」という要望に、「記録に入れることができない時間数は、菩薩のところに入れておきます。菩薩は見てくれますよ!」と答えるしかなかった。

一元硬貨が五十倍の効果をもたらす

一般大衆が慈済ボランティアに抱く印象は、「人数が多い」、「動員が速い」、「熱心に善行する」、「費用を自己負担し、休暇をとって活動に参加する」である。だが、このような形容詞を目に見える数字

で表すことはできるのだろうか？竹筒に入れた台湾ドル一元は、どれほどの影響力を生み出しているのだろうか？

形ある物に値段があるように、形の無い愛も数字で表すことができる。コストパフォーマンス（費用対効果）という言葉聞いたことがある人も多いだろう。専門機関が計算する「善行」パフォーマンスは、人々が寄付をする時の参考になるはずだ。

慈済は二〇一五年、大手監査法人である安侯建業聯合会計士事務所 (K P M G) と契約を結んで組織改善を進め、台湾で慈善基金会としては唯一『永統報告書』を出版し、これまでに三冊を出版した。

『二〇一八〜二〇一九年慈済慈善事業基金会永續報告書』では、社会的投資収益率（SROI）を初めて導入した。安侯建業が二〇一八年の板橋静思堂を例として分析した結果によると、人々が慈済に寄付したお金は、慈済の各種慈善サービスをを通じて、一元あたり八・五元の社会貢献を生み出しているという。もしボランティアが無償で負担する項目を計算に入れたならば、数値はもつと大きくなるはずである。

安侯建業聯合會計士事務所の于紀隆（ユウ・ジロン）主席は、「SROIが八・五倍以上に達しているのは、一般的な慈善機構としてはかなり上位を占める結果

です。加えてボランティアが自己負担した費用や休暇など無償の効果を算入すれば、SROIはさらに高くなり、五十倍を超えるはずです。」と説明した。このような専門分析の結果はチームを驚かせた。また、このプロジェクトは、社会的価値と影響力を評価する国際専門機構「イギリス社会価値協会（Social Value UK）」の審査を経て、二〇二〇年八月にその認証を受けた。

半年の調査を経て、影響力を数値化

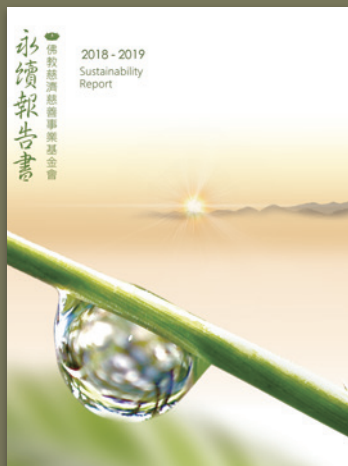
「静思堂が慈済の拠点だと思っている



永續報告書

・永續報告書（Corporate Sustainability Report：サステナビリティ報告書）とは、企業の持続的経営や社会的責任に関する目標、成果、約束、計画などの詳細な情報を、外部の人々に伝える手段である。

「慈済慈善事業基金会
永續報告書」ウェブ閲覧



人も多いのですが、実際には地元コミュニティのケア、環境保全活動、高齢者の介護なども含む、異なる年齢層にわたって活動が行われる場所であり、その範囲はとて広いのです」。安侯永續發展顧問の黄正忠（ホワン・ジェンジョン）董事兼總經理によれば、これまで台湾の様々な公益団体や活動の社会影響力評価をサポートしてきたが、一つの拠点で六種類の活動を計算する板橋静思堂の事例は、複数分野を算入した成果を表しており、複合的プロジェクトの先駆けとなるものだという。

安侯永續發展顧問の葉マネジャーとそのチームメンバーは必要なデータを収集

するため、二〇一九年四月以降、百人以上を対象とした調査とインタビューを進めてきた。慈済の板橋地区における活動が非常に多いため、まずはそれら慈善奉仕を「貧困支援と新芽賞奨学金」、「人道的ケアと災害支援」、「福祉サービスと心身の健康」、「コミュニティケアの現地化」、「職員及びボランティアの受け入れと育成」、「価値観の宣伝と理念の伝承」からなる六つの領域に分類した。アンケートやインタビューの対象には慈済の会員だけでなく、支援を受けた組織やボランティア、地元コミュニティの代表者である里長・隣長（里・隣は台湾の行政

区画）などが選ばれた。

各種ボランティア活動の中でも、在宅ケア、機関へのケア、災害支援の三つが慈済の慈善活動の重点であり、支援を受けた弱者の家庭や養護ホームもインタビューとアンケート分析の対象となった。退役軍人のケア施設である「栄民の家」の主任も葉怡秀さん率いるプロジェクトチームのインタビューを受け、このように語ってくれた。かつて国民党政府と共に台湾へ移住してきた外省籍軍人の多くが、年老いて栄民の家に入居したが、身体が弱って身寄りのないお年寄りたちは、まるで冷たい建物に閉じ込められて



●板橋静思堂の「新芽賞」授与式典で、高校生たちがシニアボランティアたちから賞状と奨学金を受け取った。専門家の評価によれば、慈済の貧困支援と新芽奨学金の2項目は社会的貢献が最も大きいものだという。（撮影・呂瑞源）

いるようだった。学生団体が時々訪れ、歌やレクリエーションを披露してくれるが、退職軍人のお年寄りにとって彼らはあくまで「お客さん」である。だが慈済ボランティアは、雰囲気が少し違う。月次や節句ごとの慰問では伝統的なお菓子をふるまい、温かく幸せな気持ちにさせてくれる。長期にわたって生活に寄り添うことで、家族のように親しい関係を築いているのだ。

慈済に加入して三十二年になり、板橋区で長年ボランティアを務める何瑞真（ホー・ルイジェン）さん



もインタビューとアンケートに参加した。彼女は一九九六年の台風九号（アジア名：ハープ）による災害や、板橋ガス爆発における支援活動を回想

●台湾全土の慈済ボランティアが、コミュニティの弱者の家庭をサポートしており、交通費は自前で無償の奉仕をし、さらには寄付を行う。写真は基隆のボランティアたちが身体障がい者の住む古い家を修繕しているところ。70名のボランティアたちが5階にある廃材を取り外し、屋外に運び出していた。（撮影・黄筱哲）

した。現場での支援活動の時間数は数えていなかったが、一日あたり十数時間は活動していたという。やるべきことを終えなければ安心できなかったのだ。時間を忘れて打ち込む人もいたが、それはその人の「本分」だからだ。

曹聡賢（ゾン・ツオンシエン）さんは災害支援の現場には必ずボランティアとして駆け付ける。支援活動において人手と物資を中断させてはならないため、朝七時から夜八時まで働くことも多い。ボランティアはいつも、「真っ先に到着して、最後に帰る」のだ。

インタビューでは、地元コミュニティ

の代表者である里長も慈済の地元ケアについて語ってくれた。コミュニティには弱者の家庭も少なくないが、政府の福祉政策には法的な制限があり、全ての世帯をケアすることは難しい。だが慈済は通知を受ければ、直ぐに人を派遣して世帯を訪問し、それぞれの家庭における具体的なニーズを把握する。評価後は定期的に訪問し、必要に応じて経済的な支援や生活物資を提供する。そのような慈善活動は、安心して生活や仕事ができるコミュニティ創りの役に立っている。

交通が不便な偏境の地にある家庭を訪問する時には、ボランティアが自費で果

物などを購入し、縁を結ぶ贈り物にする。プロジェクトチームがSROIを計算する

のためにその値段を尋ねたところ、「一年に何度も行くので、どう計算すればよいか分かりません。どれも行き当たりばったりで買ったものです」との答えが返ってきた。

無償のボランティア、自前の寄付金、費用の自己負担、休暇の自己負担、そして自前の贈り物。葉マネージャーはインタビューを重ねれば重ねるほど、慈済のボランティアが投じている時間と思いやりは、一般の人々の認識や想像をはるかに超えるものだと思いが付いた。

個人の成長 奉仕で得られるもの

コミュニティ訪問から、新芽賞奨学金、緊急災害支援、そして機関へのケアまで、慈済のコミュニティサービスが生み出す社会的価値は、ボランティアの奉仕サービスや受益者にもたらされる直接的、感情的な利益だけではない。活動がもたらす個人の成長や家庭への影響なども、社会的影響力の項目に含まれるのだ。

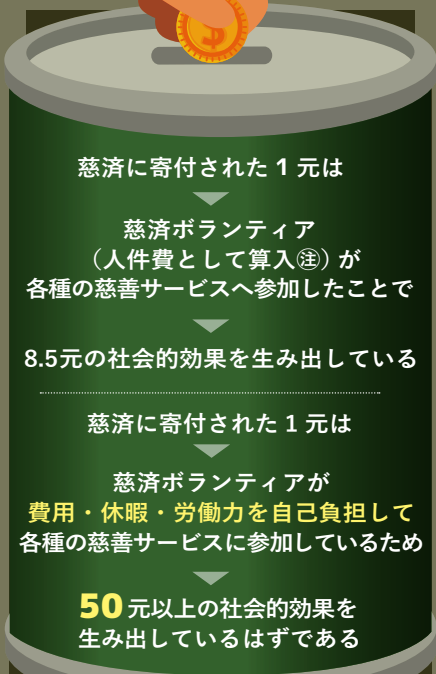
葉マネージャーはインタビューを進める中で、このようなことに気が付いた。「男は外、女は家」という伝統的な考え方の中で、退職した男性が妻の家事に口



SROI

社会的投資収益率 (Social Return on Investment: SROI) とは、社会投資報酬率とも呼ばれ、「イギリス社会価値協会 (Social Value UK) および「国際社会価値協会」 (Social Value International) が推進している。SROIを計算するにあたっては、利害関係者の参加状況を取り入れ、社会と環境の価値を貨幣価値に置き換え、実際のデータを示すことで、社会的影響力を数値化することが求められる。投入された資源を貨幣価値で算出し、生み出された効果の数値を投入資源を貨幣にした数値

で割ると、1元で何倍もの効果を作ることができるのと同じである。



^⑤ ボランティアは無給であるため、2018年の法定最低賃金(時給)をもとに人件費を計算した。

を出し、子供も独立して家にいないため、しばしば夫婦間に摩擦が生じがちになる人もいる。だが慈済への参加で相互の関わりが促され、変化が生じる。「かつて塾や工場の経営のため、お酒やタバコ及び接待に関わらざるを得なかった男性が、今では奥さんと一緒にボランティア養成講座やリサイクル活動に参加し、悪習を断つようになりました」。

またボランティアの多くは元々主婦で、家庭を守っていた自分が壇上で経験を共有したり、パソコンを勉強したり、活動記事を作成することになるとは思いもしなかったようだ。ある女性ボランティアは、慈済に加入した後に人々から

「文章が上手ですね」と褒められた。思いがけない言葉に励まされた彼女は、コミュニティの素晴らしい物語をもっと記録したいと考え、デジタルカメラや映像編集を学び始めた。

「子供たちも母親の変化に気づき、もう時代に遅れているとは思わなくなりました」。葉マネージャーは、善の循環による影響力を説明した、「年老いた母親たちに自信を与え、さらなる達成感をもたらしているのです」。

デジタル時代 数字に語らせる

これまで、慈善の生み出す影響力は感

動的な物語の一つ一つによって人々に伝えられるだけだった。だが、かつてハイテク企業で経験を積み、二〇一七年に慈済基金会の慈善志業執行長に就任した顔博文（イエン・ポーウエン）さんは、統計や分析などの数値を重んじる現代社会にあつて、慈善組織にも数字とデータが重要だと考えた。「数字にすれば、組織の運営効率をより分かりやすく説明することができなのです」。

慈善組織に対する世の中の期待が高まる中、基準は日増しに高くなっており、効果的で根拠のある数字で成果を表すことが人々の期待に応えることになる。「数字に語らせる」ことは必要不可欠なのだ。

板橋静思堂のSROIは慈済の永續報告書の一部分にすぎない。百ページ以上からなる報告書には、組織の財務状況、公益活動関係者とその主要テーマの分析、台湾における慈善の軌跡、三十年にわたる環境保全活動など、慈済の慈善志業の重点内容や方針が詳しく分析されている。

また報告書によると、二〇一九年末から新型コロナウイルスの感染が拡大したため、国際支援のニーズが高まったとあり、慈済が最も早く緊急ケア活動を開始したことについても、「団結で防疫編—全世界で福を造り、善を行う」と題する記事によって慈済が全世界の公民として発揮した慈善の行動力を報道している。



永続報告書は二〇二〇年九月と十一月、台湾檢驗科技公司（SGS台湾）による「CSRアワード・精英賞」と台湾企業永続学院（TCSA）による「CSR報告賞・金賞（政府・NGO部門）」および「社会共融（共同体）賞」という荣誉ある賞を受賞した。

近年、慈済の持続的発展に関する努力が、徐々に人々に認められるようになってきた。ボランティアの曹さんは、実感を込めてこう語った。今はデジタル時代なので、私たちがそれに合わせる必要がある。ボランティアの働きを数値化すれば、自分たちが本当に活動しているのだと

いうことや、どのくらい活動しているのかということや、何を人々に説得することができる。「私たちの行動を社会に信用してもらうためには、行動したことを話し、話したとおりに行動する必要があります」。

国際舞台で認められ、客観的な審査機関により賞を受賞したことは、長年慈善に取り組んできたボランティアにとって大きな意義がある。何さんによれば、永続報告書が認められたことが「呼び水」になるのだという。永続報告書とSROIによる数値の算出が国際的に認められたことにより、他の慈善組織も慈済の方法をモデルとすることができると共

に、さまざまな災害支援活動の成果を共有することも可能になる。曹さんにとっても「正直に言うと、賞を獲得したかどうかはそれほど重要ではありません。受賞は『一時の』栄光感を与えてくれますが、体を使って奉仕する事こそが『常なること』だからです」。（一部資料提供・大愛テレビ局番組部門・楊景丹）

（慈済月刊六五一期より）

●『2018年〜2019年慈済基金会永続報告書』は、台湾企業永続賞の政府およびNGO部門において、慈善基金会としては唯一「永続報告賞・金賞」および「社会共融（共同体）賞」を受賞した。慈済基金会の顔博文執行長（左）と張済舵副執行長（右）が代表して受け取った。（撮影・顔福江）

大きな慈善の力になる

慈済ボランティアには五つの特色がある。「無償」で行われる奉仕の経済貢献値は二〇一九年だけで百二十一億台湾ドルを超えている。ボランティアたちは交通費および宿泊費を「自己負担」し、「休暇」を取り、慰問では「自分で贈り物」を用意する。お金や物資、株式、不動産を寄付し、医学教育のために献体を行う人もいる。

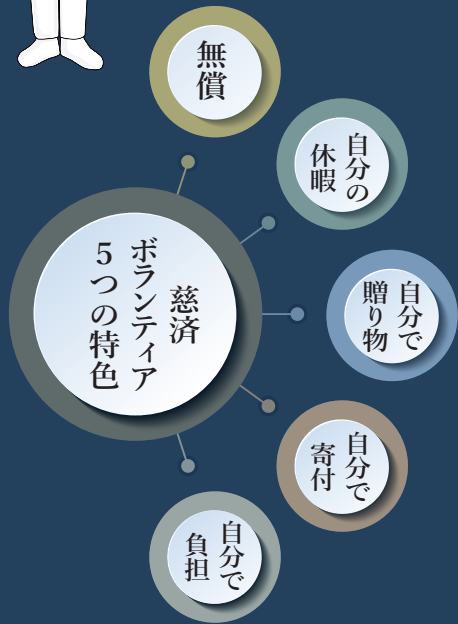
慈済ボランティアの二〇一九年度における総動員数は延べ千八百万人に達し、恩恵を受けた人の数は二千万人を超えた。背後にある諸々の奉仕による愛の価値が社会にもたらした効果と影響力について、国際的コンサルティンググループの「安侯建業（KPMG）」が専門的に分

析したところ、例えば二〇一八年「慈済板橋静思堂」が携わった「コミュニティサービスの社会的投資利益率（Social Return on Investment、SROI）」は五十・三七にも上った。これは、一元の投資が五十・三七元の効果を生み出したことを意味し、慈善効果としてはほぼ世界最高ともいえる水準である。

世の中を助けるには、皆が協力する必要がある。慈済ボランティアが愛の力を注ぐだけでなく、誰もが影響力を発揮することができる。統計によれば、慈済が受け取った寄付金のうち、九十九%は個人の寄付だ。一人一人の小さな力も、積もり積もれば、地球規模の力を生み出すことができる。（慈済月刊六四九期より）

【2019年度】

ボランティア総動員数 延べ1,815万3,297人
 経済貢献相当額 121億6,270万8,990元



慈善の経済価値

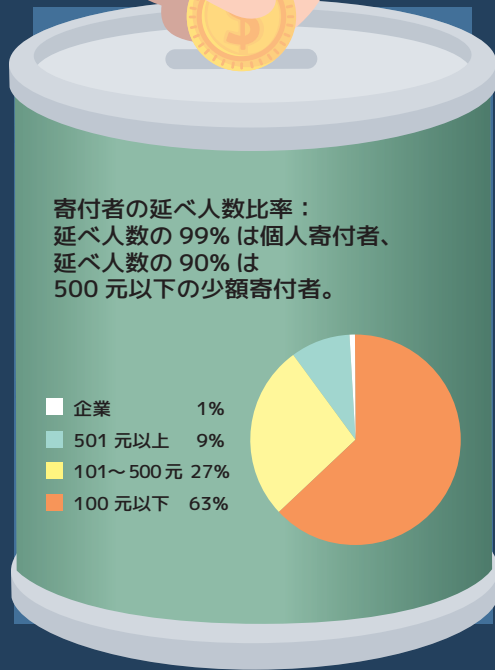
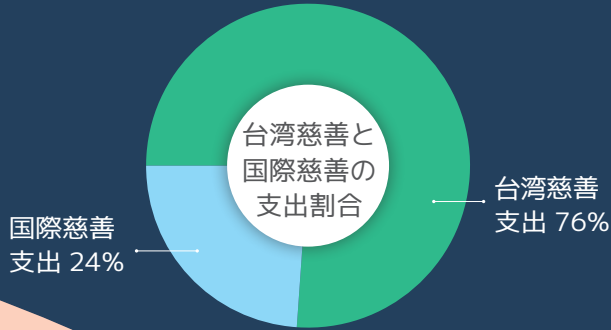
計算根拠：年間投入ボランティア人数（延べ）× 1人当たり670台湾ドルにて計算。
 参考：2019年の法定最低賃金（時給）150元（4時間で計算）、昼食代70元として計算しました。ボランティア延べ人数を1日1人として計算し、国内外の交通費、宿泊費、ボランティアが自前で準備した結縁のための贈り物などの費用は含まれていません。

経費支出について

台湾での慈善用途

- ・ コミュニティや偏境地域における貧困救済：長期的支援、在宅ケア、就学補助、緊急災害支援、健康促進、コミュニティ発展への取り組み。
- ・ 介護サービス推進：介護センターの設立、認知症予防教室とデイケア、独居老人ケア、コミュニティケア拠点設立等。
- ・ 青少年の公益発展：青年の公益参加、人材育成、青少年心理成長計画を推進。
- ・ 児童、婦女の心身障害福祉サービス、施設の支援と経費補助。
- ・ 災害の防止・準備・支援：災害支援、防災、減災のための工事。災害支援物資と設備の研究開発。
- ・ 環境保全：環境保全教育、資源回収と再利用、新しい科学技術の研究開発を推進。

慈善支出の比率：台湾が主体



(慈済は安侯建業聯合会計士事務所にて2019年度財務諸表の監査を委託した。公認会計士による監査を経て、2020年5月14日に「無限定適正意見」の監査意見を得た)

花蓮に愛を注ぐ時



●閉じ込められた乗客を救出すると同時に、早急に運行を復旧させるため、台鉄社員は夜を徹して損壊した線路を補修した。車輪に押しつぶされ、激しく損傷したコンクリート製の枕木が、事故当時脱線して完全にコントロールを失った列車の様子を物語っていた。

【特別報道・台鉄事故】

災難によって、花蓮に愛と善が注がれた。この愛が、光や花火のように瞬時に現れては消えるものではないことを願っている。災難から教訓を学び、単なる災難として終わらせるのではなく、昇華させることで価値が生まれるのである。

文・陳美翠（慈濟ボランティア） 撮影・蕭耀華 訳・田中亚依

四

月二日夜十時丁度に、我々はタロコ号の事故現場に到着した。

息子の子豪（ツーハオ）と私は正午に台北を出発し、『慈濟月刊』のカメラマンである蕭耀華（シャオ・ヤオフワア）さんと共に三人で花蓮に直行した。連休初日だったからなのか、或いはタロコ号の事故のせいなのか、蘇花公路は一路渋滞した。

私は慈済の各部門との連絡を担当し、随時最新情報を把握して道路状況も記録

した。パトカー、救急車、消防車、ひいては軍用車や霊柩車までがサイレンを鳴らしながら通り過ぎ、張り詰めた奇妙な雰囲気の中にいた。車は動いたり止まったりしながら、夜十時、ある分かれ道に到着した。そこは照明で煌々と照らし出され、多くの警官が交通整理して秩序を保っていた。

事故現場へ向かう道は真っ暗で、蕭さんはスマホのライトで階段を照らし、

子豪が私を支えながら一歩ずつ下に向かつて歩いた。更に進むと、舗装されていない道に出て、カーブを曲がると大きな斜面になっていた。突然、胸がいつぱいになり、犠牲者の数が急増していることを思いだし、感情が抑えられなくなってしまう。思わず大声で泣き出してしまった。

「お母さん、気を付けて！」と子豪は軽く私の背中を叩いた。彼はそうやって私を慰めた。

盛り土と乾き切った排水溝を渡り、三人は恐る恐る大きな広場に出た。何台もの通信会社の基地局車があり、天高く伸びるアンテナが目立った。蕭さんがはしごを登って数枚写真を撮ると「あっちの

方が事故現場です」と言った。

迂回して進むと、明るく照らされた場所に大勢の警察や消防、救急隊員、記者らが待機する中、作業員が線路上で作業に追われていた。

トンネルの方向には、事故車両上部のライトと、下部の左右に二つの赤いライトがついていて、まるで血の滲んだ両目のように見えた。そしてこの悲劇を訴えるかのように黙って遠くを照らしていた。

心にぽっかりと穴が開き、ただ茫然と空を眺めていると時間が止まったかと思えたが、あつという間に一時間余りが経過していた。

夜が更けているというのに、慈濟の奉

仕テントにはボランティアが残っていた。「まだ弁当や水を取りに来る人がいるので、帰れないのです」。それを聞いて私は感動した。

「今から葬儀場に行きましょう。慈濟ボランティアが交代で夜通し、犠牲者の遺族に付き添っています」。私は、「二十人が一チームとなって、二時間ごとに交代しています」と聞くと目頭が熱くなった。

遺族の休憩所に行くと、スマートフォンやノートをしまい、写真も撮らずに、「心」で記録した。二人の記者は分かれて仕事にあたり、私は細かく観察した。休憩所にいる遺族にはそれぞれ慈濟ボランティアが付き添っていたが、皆無言だった。悲

しみが大きすぎて言葉を失ったのだろう。

「最新の写真が公表されました。ご家族の方はご確認下さい……」私は悲しみの現場に居たたまれず、その場を離れて当直のボランティアと言葉を交わした。彼らは夜十一時から午前一時までのシフトとのことだった。本当に大変！いや、幸せなのかもしれない。

午前一時過ぎ、顔を上げると黒々とした「冷凍室」と書かれた三文字が見え、衝撃が走った。空は鉛色で、屋根の上で下弦の月が浮かんでいた。風がとても冷たかった。

そんな情景を目の当たりにしながら、一瞬にして失われた多くの命やその家族

家族が突然の悲劇に見舞われ、なす術のない時、我々にできることは？

・共に待ち、悲しみを分かちあい、彼らが必要とすることを手伝い、食事を用意し、彼らの健康に注意し、送り迎えをする。

・悲しみにくれて希望を失っている人には、それを抑えようとはせず、思うままに泣き叫べるよう静かに寄り添うこと。また適切なタイミングで体をさすったり、涙を拭いたり、軽く肩を叩いたり、手を握ってあげること。

・彼らの悲しみや苦しみを軽減しようとはせず、彼らの孤独感を癒し、絶望の中で肉親とお別れがきちんとできるように寄り添うこと。

●慈済は花蓮葬儀場に窓口を設け、夜が更けても遺族に付き添い続けた。

に思いを馳せた。無常、それは全く気付かないだけで、いつも我々の側にあるのだ。
ああ、曉風残月のような凄涼な境地は言葉にならない。

天地が悲しみを分かち合うかのような風雨

四月三日は午前二時に就寝したが、四時半には子豪に起こされた。ここ数日は寝つきも悪く、ほぼ眠れなかった。まだ夜は明けていなかったが、慈済ボランティアが朝食を配る様子を撮影するため、我々は急いで車で向かった。

「どうぞ！慈済の朝食を召し上がって



下さい。ベジタリアン食です」。私は「特捜隊」の若者たちに朝食を食べるよう声をかけると、彼らは微笑みながら礼儀正しく、「はい、ありがとうございます！」と言った。

「どうしてそんなに服が汚れているんですか？」私がそう聞くと

「車両の中まで入ったからです」。

「え？トンネルの中の車両ですか？」

「はい」

「じゃあ……」少し驚いて、「遺体も運んでいるのですか？」と聞いた。

「それも含めてです……」彼らは苦笑いしながら答え、張と名乗る若者が引き続き私に話しをしてくれた。

「特捜隊」は花蓮県消防局に所属して
いて、メンバーは皆とても若い。

「今回の事故は本当にひどすぎます。
犠牲者の数が多く、しかもトンネル内で
折り重なっているので、救出はかなり困
難です。我々は破壊用器具を使って、挟
まれて動けない人を救出しています。遺
体は専用の袋に収めてから搬出していま
す。現在、犠牲者は全て把握しましたが、
六号車にはまだ遺体の半分が見つかって
いないようなので、引き続き捜索しなけ
ればなりません」。

彼の話聞きながら、不思議に思い、
こう聞いた、

「怖くないのですか？」

と傘をしっかりと持つのが大変です」と荘
さんが言った。

広場に行くと、心が切り裂かれるよう
な切なく痛ましい泣き叫ぶ声だけが聞こ
えた。その場にいたボランティアや記者
も耐え切れず涙を流した。

ある人は写真を、ある人は衣服を手に、
声の限り叫んだ。

「帰って来てくれ！おじいちゃんもお父
さんもみんな来たよお、一緒に帰ろう…」。
「お母さんが迎えに来たよお、迷子に
なっちゃだめだよお。弟も待っているか
ら絶対帰ってくるのよお」。

運転士の袁淳修（ユエン・チュンシュウ）
さんの奥さんとお姉さんは、チェック柄

「とてもショックですよ」。直接、回答
しなかったが、「二〇一八年の花蓮地震
よりも衝撃的です」と言った。

午後三時過ぎ、大型バスが続々と到着
した。遺族らは位牌を抱えながら、招魂
のぼりを握り、下車時には黒い傘をさ
して、悲しみを湛えながら前に進んだ。
慈済ボランティアが順番に一組ずつに付
き添った。

ボランティアの荘月娥（ツオン・ユエ
オー）さんは位牌と招魂ののぼりを抱え、
郭継祖（グオ・ジーズ）さんは黒い傘を
さし、お手洗いに行った遺族を待ってい
た。「風が強く、ほこりが舞い上がって
います。位牌を抱えながら招魂ののぼり

の彼の服を振り回しながら、「もうトン
ネルの中に隠れてないで、早く出ておい
でえ！」と叫んだ。彼女たちが二枚の硬
貨でポエ占いをしたが、数回やり直して
やっと同意を意味する表と裏が出た。

二人は安心した様子で「良かった。一
緒に帰るって」と言った。

招魂もポエ占いも多少は心を癒す効果
があるのだ、と私は思った。

ボランティアの一人が、遺族が涙を拭
えるようにとティッシュを配り、さらに
ビニール袋でティッシュを回収してい
た。なんて気が利くのだろう。

招魂も終わりを告げる頃、急にあたり
が暗くなった。冷たい風が吹きはじめ

と、多くの人は上着を羽織り、帽子をかぶってマフラーを巻いた。そして間もなく雨が降り始め、色とりどりの傘がぽつぽつと開いた。

天地が悲しみを分かち合っているかのような風雨だった。

身体の不浄を観ずる、

一切の受は苦であると観ずる

葬儀場では記者たちが待機しながら、休んだり、話をしていた。私は彼らに、この数日で忘れられないほど感動した場面があるかと尋ねた。

「慈濟ですよ！」ある記者はそう言う

と、「災害や事故が起きると、いつも真っ先に到着し、様々なリソースと支援を提供するので、皆、安心していられるのです」と続けた。

八号車に取り残されていた女性の乗客は、体の上に他の乗客が覆いかぶさり、さらに座席や荷物などが載った状態だった。彼女は、「私は体中血だらけでしたが、自分の血なのか他の誰かの血なのか分かりませんでした。酷い疲れを感じて、眠ってしまいたいと思いましたが、ここで眠ったらもう目が覚めることはないと言った。」

「両親や夫、息子、そして会社の同僚のことまで色んな事を考えました。ああ、

もし生きて出られたら、もう上司や社長に愚痴を言わず、周りの人皆に良くしようと思いました」。

私は、世に衝撃を与える災難が起きた時、世に警鐘を鳴らす覚悟をしなければならぬという證嚴法師の言葉を思い出した。「ブツダは我々に、世間は苦しく、空しく、無常であり、だからこそ限られた時間を大切にして、生命の価値を發揮しなければならぬ、と説いています」。

また法師は、『愛』は十二因縁の中において煩惱の根源なのです」とも言っている。そえゆえ愛する者を失うと、悲しみのあまり死にたくなるのだが、これは小愛の苦しみなのである。

『四念処』にある教えの身体の不浄を観ずる、一切の受は苦であると観ずる、心の無常を観ずる、諸法の無我を観ずる、をよく理解することです」。

災難によって、愛と善が花蓮に注がれるのを我々は目にしました。この愛が光や花火のようにすぐに消えてなくなるのではないことを願うばかりだ。

災難から教訓を学び、深い反省を経て、ブツダの慈悲心を体得し、災難を単なる災難で終わらせるのではなく、それを昇華させ、価値のあるものにしなくてはならないのだ。

この災難を、一つの大きいなる教育にしていきたい。(慈濟月刊六五四期より)



【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願
絵・林順雄

敬虔に齋戒して、危機を乗り越える

地上に存在する、人間（じんかん）の苦難は
人心の小さな無明が集まってできたものである。
災難が目前に差し迫った今、早く目を覚ますべきである。

「
」の世の苦しみに無常を念じ、天
の下、地の上にある人の世は正

に試練に直面しています。地、水、火、
風による災害が世界各地で途切れるこ
となく発生しています。新型コロナウイルス
イルスは世界に拡散して、虚空をも覆
い、各国に蔓延し、急を告げています。

台湾のコロナ禍は緊迫し、人々に生
活様式を変えるよう、警鐘を鳴らして
います。集会活動を停止し、一時の欲
念によって不急不要な所へ行つてはい
けません。欲念を抑えて、行動が欲望
からなのか必要に迫られているのかを
分別し、自分と他人を愛するために、

自分は自粛するべきです。皆が健康で
あれば、私たちも健康になるのです。
社会が一日も早く以前の自由を取り戻
すことを願っています。

インドでは、五月初めから毎日
三十五万人を超える感染者が報告さ
れ、平均して一秒に四人が感染してい
ることになり、首都ニューデリーでは
五秒に一人が亡くなっています。医療
も薬も病床も不足している中、感染者
が多くて病院が受け入れられず、道端
で待たなければなりません。患者が呼
吸困難に陥っても、酸素ボンベが不足
しており、お金持ちの人も買えない状

況下で、貧しい人は絶望して死を待つばかりです。息も絶え絶えになりながら家に帰りつく前に亡くなっています。家族は目の前で愛する人が亡くなるのですから、その心の痛みは形容し難いものです。

仏陀はかつて弟子たちに、命の長さはどれくらいか知っているか、と聞いたことがあります。ある人は一日、ある人はご飯を食べている間だと答えました。しかし、仏陀は頭を横に振り、それでは生命を理解したことにならないと言いました。するとある弟子が「生命は呼吸の合間にある」と答えました。仏

陀は頷き、世間は無常であり、人の命は呼吸の合間にあるのだと言いました。

呼吸よりも更に短いのが刹那です。息を吐いても吸うことができなければ、瞬時に無常は訪れます。インドはこのように、今は息をしても次の瞬間、止まってしまいかどうかは知る由もありません。今は無事でも、この一日を過ごせるかどうかは分かりません。今日一日、次の一刻、次の一秒がどうなるかと人々は恐怖に満ち、心身ともに疲れ果てています。

疫病に国境はなく、ウイルスは人種も肌の色も区別しないため、皆が敬虔

に戒め慎み、厳格に自分を護ると共に、人助けに努めなければなりません。インドのコロナ禍はまるで津波のように、一分一秒を争う素早い行動を必要としています。感染した二千万人の一秒を、我が身のことと受け取り、彼らが危機を乗り越えられるよう支援しなければなりません。

去年から、慈済はインドの神の愛の宣教師会やカミロ修道会などの組織と協力して、防疫と貧困救済を行なって来ており、貧しい人々に物資を配付しています。今では感染が更に拡大し、カミロ修道会の神職者たちは仁徳と慈

愛、勇気でもって、危険を恐れず、病院で支援しています。インドは世界の人々の愛を必要としています。私は基金会の職員に、「これは緊急事態であり、現地の機構から救援を求めてくるのを待つのではなく、迅速に『請われざる師』となつて積極的に支援しなくてはなりません」と言っています。国際間では防疫による制限で、物資や人の出入りが困難なため、今は現地にいる人が関心を寄せて支援するしかありません。

人同士の互いの気遣いは、有形の支援だけでなく、無形の誠意を表すことが必要で、それが即ち齋戒することな

のです。人は皆、命を惜しみますが、自分の命を愛するだけでなく、一切の生霊も愛さなければいけません。国連食糧農業機関の統計によると、一秒に二千五百余りの生き物が人類の食用に供給され、一日に二億二千万余りの生命が人類に食べられています。肉を食べなければ、殺生することはなく、即ち放生（ほうじょう）することになります。誰もが菜食すれば、一秒に二千余りの生命を放生し、一日に二億余りの生命を放生するのと同じです。これは無量の功德であるばかりでなく、至誠の敬虔な心を表すことになります。

同じ時に異なる現実の空間では、多くの人が非情な疫病の災難の下に置かれています。世の中のことは自分とは関係がないとごまかしたり、逃避してはなりません。災難が差し迫った時、覚めなければなりません。元より自分の中にある清浄な仏心を自覚するので。一念の無明で心に些細な貪、瞋、癡が起きます。それらを見ることも触ることもできませんが、動き出した欲念は際限がありません。そのような僅かな無明が集まって造り出された業力も際限がなく、この世の至る所に苦難をもたらします。

この疫病はすでに人の力で抑えることはできず、欲念を抑え、口の欲を節制し、尊い良知でもって、これ以上殺生せず、智慧と他人を思う心を高めるべきです。誰もが身をもって模範を示し、口伝えにすれば、一人、十人：百万、千万人に影響を及ぼすことができるのです。人心が敬虔で、誰もが齋戒すれば、大きな功德を成すことは難しいことではなく、多くの生霊は私たちと共に大自然の法則の下で、平穏な日々を送ることができます。肉食を菜食に変えれば、世の衆生は共存共生することができるとです。

渦巻く怒涛の荒海に揉まれる一隻の船の中にあっても、皆が恐れるのではなく、落ち着いて規律を守り、同じ方向に向えば、無事に乗り切ることができます。毎日同じ時刻に、世界中の慈濟（ツーチー）人は一斉に祈っています。その敬虔な心の祈りは諸仏に届いています。平隠無事である人たちは、お互いに祝福し合うだけでなく、善い人として善の心から善い事をして福を造ると発願し、皆の福を集めて保護膜とするのです。この禍が速やかに去ることを願っています。

（慈濟月刊六五五期より）

ミャンマー

デモ行進の 人混みを避け、 被災者世帯を 支援する

◎文・黄露尧（ミャンマー連絡所職員）

撮影・Thae Zar Ni Aung

訳・高雪白

ヤンゴン市ティンガンヂュン・タウンのザヤ・トゥカ通りの住民は日雇いで生計を立てていたが、コロナ禍で仕事を失った。そして、二月八日の未明、住宅区域で大規模な火災が発生し、十七棟が全焼して、六十人余りの人が慈済の援助で建てられたティンガンヂュン・タウン第四中学校に避難した。

ミャンマーでは二月にクーデターが起き、抗議デモとストライキが全国に広がり、殆どの商店が休業を迫られた。慈済ボランティアは視察した後、営業を続けていた商店で物資を購入し、慈恵たちが静思堂でそれらを小分けして梱包した。そして、直ちに見舞い金とエコ毛布、食器類、蚊帳、白米等二十二種類の生活物資を火災の被災者に届け、暫時の困難を乗りこえる支援をした。





撮影・Myint Thu



慈濟は去年五月から、コロナ禍での貧困支援活動を行ってきた。交通と人手不足の困難を克服してヤンゴン市とトングワ町、カヤン町等六つの地域で配付を行い、今年一月までの統計で、対象者は七万六千三百世帯に上った。二月からは市街地のあちこちでデモ行進が行われたため、配付活動は暫く中止することになった。

一月、ヤンゴン市ミンガラドン工業区で、慈濟は食糧が底を突きそうになっていた日雇い労働の貧しい世帯に米と食用油を配付した。コロナ禍の期間中、年配ボランティアが感染防止対策で外出することができなくなったため、慈濟青年ボランティアたちが名簿の確認と作成、配付と後の訪問ケアを担った。彼らは任務がある時は静思堂で指示を待ち、その他は家で自修した。

ティンガンデユン・タウンに住んでいる慈青のアウン・イエットさんは、二月の大火で火が隣まで迫った時、真っ先に慈青の制服を取り出した。彼は「これは自分にとって唯一の大事なものだからです」と言った。十八歳の慈青スー・ウエイ・テットさんは、一年来、配付活動に参加して見聞きして来たおかげで、今まで気が小さかった自分が役割分担することを学び、「人々の先頭に立つてもっと善の行動をとるように呼びかけます!」と言った。(慈濟月刊六五三期より)



撮影・陳坤女

タイ

◎文、撮影・黄娟（慈濟タイ支部職員） 文・明彤

終息しないコロナ禍 苦しい日々を送る貧困世帯に寄り添う

タイでは去年十二月、第二波のコロナ禍が発生し、バンコクを含む二十八の都市では厳しい行動制限令が敷かれ、集会の禁止や外出が制限された。慈濟ボランティアは、日当で生計を立てている貧困世帯の食糧が続くかどうか心配になり、積極的に各地の自治体と支援の見通しについて相談した結果、二月初めによりやくサムットプラカーン県テファラク町で、今年最初の配付を行った。

コロナ禍の規制で、一日わずか百世帯しか配付することができなくなったが、素



早く配付できるよう、予め米や小麦粉、油、砂糖などの物資を梱包し、コミュニティの奥深く入り込んで、物資を受け取りに来られない人たちに届けた。九十歳という高齢のユアクおばあさんは、建築現場の日雇いをしている孫に頼って生計を立てていたが、慈済の物資を受け取っても喜んだ。また、八十歳のプアンおばあさん（上図）は寝たきりの息子の面倒を見ているが、村の七百余りのケアを受けている世帯と同じように、三カ月間物資の配付が受けられることになった。

去年の第一波のコロナ禍で、五万四千八百三十世帯余りに配付したのに続き、今年も二万五千世帯への配付を行い、グレートバンコクを始め、ラチャブリー県、ノンタブリー県などの貧困家庭と難民の生活を支援する予定である。

タイ

難民ケア

大規模施療から毎週の診療まで

◎文・シンガラット・チュンチョム、
ラッタナシヨ・プラムアンサブ
(慈済タイ支部職員)
訳・明陞

「タイではビザがないと職に就くことができません、薬を買うお金がない……」。身分証明書を持たない難民のジャフリ・ミシャルさんとお母さん、妹さんは、パキスタンからタイに逃れて来たが、一家四人の生活は行き詰まってしまった。一月三十日、ようやくタイの慈済施療センター設立直後の患者として受け入れられ、希望していた喘息と皮膚の薬をもらうことができた。

慈済タイ支部は二〇一五年から毎月一回難民への施療を行なってきた。バンファエオ総合病院などのタイ慈済人医会に籍を置く医療スタッフとボランティアは、現地のNGOと協力して奉仕し、この五年間で支援を受けた難民は延べ

八万九千人を超えている。去年の施療はコロナ禍で集会が規制されたため、中止になったが、タイムリーな医療を受けられるようにと、慈済ボランティアは今年一月、バンコクの静思堂に施療センターを設立した。週に二日、家庭医の診察と慢性病治療及び心電図、X線等の検査による補助診断を行っている。大規模施療と異なる点は、外来では不法滞在者にも奉仕することができ、難民カードの有無に関係なく、誰もが医療を受けることができる。ところだ。

施療センター設立直後の患者である六十数人の難民は、通訳ボランティアのサポートを受けながら医療スタッフによる診療を受けた。一つ一つ防疫規定を厳守しており、三月からは慈済ケア世帯の世話もするようになった。

(慈済月刊八五三期より)

撮影・桑瑞蓮



慈済基金会が万国宗教会議の評議員の一員に

国際的なプラットフォームに繋がり、善がさざ波のように広がった

二〇二一年より、慈済は「万国宗教会議」の評議員として、地域のニーズに応えるために様々な組織と協力して責務を果たしている。長年にわたって国際的なプラットフォームの各種チャンネルを通じて、慈善団体との協力によるプロジェクトを進めてきた。それによって慈済の愛は、今まで行き着けなかった所にも到達し、善のさざ波はより遠くに広がっている。

年

の暮れ、冬本番になった。冬至になると、北半球では最も寒い時期になることを意味している。宜蘭県頭城

鎮にある大溪漁港の岸边には、薄手の半袖シャツと短パン姿の三百人余りの外国人漁師が集まり、慈済がカトリック教台

湾カリタス基金会に寄付した防寒物資を受け取るために列を作っていた。

漁師はほとんど、インドネシア、フィリピン、ベトナムなど熱帯の国から来ており、台湾に来る前は寒い冬を経験したことがなく、今まで体を冷やさないための

「労働基準法」で保障されていない漁師は給与が低い上に、斡旋仲介業者への手数料を返済しなければならなかったため、家族に送金することすらろくにできないのだから、防寒服を買う余裕などあるはずがない。

長袖の服さえ着たことがなかった。行政院農業委員会の統計によると、台湾には約二万人余りの「海外雇用」の外国人労働者がいる。彼らは家計のために、台湾の漁船で漁業に従事している。私たちの食卓に上る様々な海の幸の大部分は、彼らが苦勞して捕獲してきたものである。

工場労働者や介護の仕事と比べると、

冬になると、外国人漁師のために多くの民間団体が防寒服の寄付を募る活動を行なっている。今までの例を見ると、数百ケースを下回ることはなかったが、二〇二〇年は新型コロナウイルス感染症の影響で、物資を募ることがかなり困難だった。そこで、長い間外国人労働者を支援してきたカトリック教台北教区牧靈

センターは、所属するカトリック教台湾カリタス基金会を通じて慈済に支援を申し入れた。こうして慈済による防寒着や物資の寄付が、外国人漁師へ向けに行われることになった。

信仰が違っても、共同で善行する

寄贈式典は台北のセントクリストファーズ教会で行われた。慈済基金会は三百枚の特厚毛布、二千枚のマフラー、二千足の厚手靴下、二千個の毛糸の帽子、九百二十五枚のジャケット、二セットの多機能折り畳み式ベッド（福慧ベッド）

及び薄手の毛布を提供した。多くの慈済ボランティアと外国人労働者や留学生が出席する中、当教会のエドワード・パキング神父は、カトリック台北総教区を代表して、慈済基金会の顔博文CEOに感謝状を手渡し、慈済がカトリック教と協力して、台湾で苦勞して働いている外国人漁師に関心を寄せていることに感謝した。防寒物資は毎週土曜日、牧霊センターが行う外国人漁師に対するケア活動の時に配付する。

寄贈式典の一カ月後、善の輪を広げるために、慈済「国連ワーキングチーム」の責任者である曾慈慧（ゾン・ツーフイ）

さんは、クリスマスイブに台湾カリタス基金会の執行長である李玲玲（リー・リンリン）シスターを訪問し、当基金회가ケアしている各国で慈済の慈善志業と結合し、宗教を越えた慈善プロジェクトを世界で推進することに更なる期待を寄せた。

曾さんは、二年前にバチカンで開催された宗教会議で李玲玲（リー・リンリン）

●2018年、万国宗教会議がカナダのトロントで開催された。慈済はサブフォーラムでプレゼンテーションを行い、慈済が気候変動問題に対して、どのように実質的な環境保全活動をしているかを報告し、実例が理念を実証していることに、参加者が肯定した。（撮影・梁延康）





シスターと知り合った。「カリタスは、慈済の慈善行動とよく似ており、方向も同じです。ただ、追隨する人と恩恵を与えた対象者が異なっているだけです」。

バチカンに属する国際カリタス基金会は、百以上のカトリック慈善団体のメンバーを有しており、長期的に様々な国で慈善活動を行っている。慈済と国際カリタス基金会は、長年にわたって災害支援で協力し、西アフリカのシエラレオネ共

●慈済は2018年、ポーランドで開催された第24回国連気候変動会議に招請された。10回の記者会見を行なって、環境保全と菜食の推進経験を各国の代表と共有した。(写真提供・慈済花蓮本部)

和国、メキシコ、アメリカでの食糧配付や貧困救済プロジェクトなどの人道支援で協力してきた。とりわけ、シエラレオネでの慈善と医療の協同支援は七年間続いている。二〇一九年、慈済はバチカンに招待され、フランシスコ教皇と接見すると共に、諸宗教対話評議会での宗教団体やNGOと宗教を越えるチームを組んで、慈善活動について意見交換をした。

国際プラットフォームの レバレッジ効果

ここ数年、慈済国連ワーキングチーム

は、積極的に主要な国際プラットフォームでの発言に力を入れている。二〇一〇年から、国連経済社会理事会との特別協議資格のあるNGO(NGO in Special Consultative Status with ECOSOC)として順次、国連信仰諮問委員会や国連環境計画など国際機関の公共会議に参加し続けている。

二〇一八年にカナダのトロントで開かれた万国宗教会議の開会式で、国連報道理事会主席のブルース・ノッツ氏が、慈済基金会と證嚴法師を特別に紹介し、また、法師の法話ビデオを流した。

八十カ国から二百以上の団体代表、約

一万人が一堂に集まった盛大な式において、慈済はサブフォーラムでプレゼンテーションを行った。慈済の気候変動に対するリサイクル活動の取り組みと、数えきれないほど多くのリサイクルボランティアがなし遂げてきた台湾環境保全の奇跡を紹介した。また会場で、回収したペットボトルによって再生された衣類や帽子、エコ毛布などを展示し、「ゴミが黄金に変わり、黄金が愛に変わる」過程を、一連の環境保全プロセスで紹介した。このように実例で理念を実証したことが参加者に認められ、二〇二〇年十二月には評議員の資格を獲得し、二〇二一年一

月に発効した。

な団体の資源を結集することで、各方面から寄せられた善意の寄付金と大愛を、困っている人に確実に届けられるのだ。「慈済人の目が届かない所や行くことができない所で、彼ら宗教パートナーが慈済の目と手になってくれるのです。カトリックやキリスト教との対話が、二〇二一年の最重要課題です」。曾師姐は重ねて、慈済は宗教間の交流に尽力しており、永続的な平和を期待するだけでなく、様々な宗教団体の力を結集して、国連の組織や各国政府にも社会福祉政策で協力し合うよう促していきたいと説明した。

また、もし宗教が地域社会のルーツで

曾師姐（スージエ）によると、万国宗教会議は宗教を跨ぐ国際的な主要プラットフォームであり、慈済が評議員の資格を得たことは、それが発言のチャンネルとなって、「生きとし生けるものは皆平等」という慈済の理念や地域社会での慈善活動、災害支援活動の現場からの第一報のメッセージをメインプラットフォームで共有できるという希望が持てた。それだけでなく、慈済が世界各地の状況をリアルタイムで知りたい場合に、他の宗教団体の協力を得ていきたいと願っているそう。互いに意見を述べ合い、様々

あるなら、宗教団体は政府の後ろ盾のようなものであり、所轄の役所にとつて地域社会で活動する際の評価根拠となり得る。「地域のニーズを実際に第一線で奉仕活動に当たっている人が政府に伝え、支援計画ができた後でも、宗教信者は問題に直面する可能性があり、それを改善するための提案を行うこともできます」と述べた。

新型コロナウイルスのワクチンを例にあげてみよう。アメリカ食品医薬品局（FDA）がワクチン接種を認可した後、多くの人が家の近くの教会やお寺で、「ワクチンの接種はするべきですか？副反応



豆知識

万国宗教会議

1893年にアメリカのシカゴで設立された、世界で最大規模を持つ多元宗教信仰集会であり、宗教間を越えて協力するための重要な国際的プラットフォームでもある。そこではいつでも国連が実施した様々なプロジェクトを見ることができる。

現在、議会のメンバーは24名で、議席の期限は1年から3年までである。慈濟は2020年初め、2人のメンバーの推薦により、6カ月の審査を経て、同年12月に、3年期限の議席を獲得した。

心をフィードバックすることで、政府はワクチンの配分や人力、所用時間をより正確に見積もることができる、少ない労力で倍の効果を上げることができるのです。

ネットワークで繋ぎ、タイムリーに支援する

二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるった。今年一月中旬には、世界で確認された感染者数が九千万人を超えた。しかし、スポットライトが当たらないところでは、貧困、暴力的紛争、民族や宗教的迫害による難民が、緊急支援を待っている。ところが、二〇二〇年にコロナ禍で分断された状況下では、国を跨いだ支援人力が限られていた。感

はありませんか？」と質問したり、折ったりしていた。人間は不確実性と予測不能な未来に直面した時、科学的根拠で納得してもらう以外に、民衆の求める心の慰めと情緒治療としてしばしば宗教という無形の力に頼ることがある。

各宗教団体は時事問題に対して、それぞれオペレーションマニュアルと方法を持つている。これらマニュアルをどうやって正しく機能させてコミュニティを導き、人々の健康を守るか。全ての宗教団体が共に努力しなければならぬことである。「全員が同じプラットフォームの上で、それぞれの実行やケアの方法、

地域社会のニーズに応えている計画を共有するのです。競争ではなく、協力して方法を見出せれば、宗教間の融和が得られるのです」。「万国宗教会議のような教を跨ぐプラットフォームで、日頃から評議会の事務を遂行して発信をする必要があります」と曾師姐が強調した。

アメリカでの新型コロナウイルスのワクチンの例に戻ってみよう。「ワクチンの接種が始まると、政府は慈善団体や宗教団体に、地域社会の高齢者、立場の弱い人々、女性、子どもの状況や異なる民族のワクチン接種に対する意欲などを尋ねて来ました。コミュニティの反

●2020年の雨季に、アフリカのシエラレオネ共和国の首都フリータウンで水害が発生した。慈済は現地の長年のパートナーと共に、エボラ出血熱の生存者や社会福祉施設に白米、五穀粉、手洗い用バケツなどの物資を届けた。ボンバリ・セーフホームに保護されていた女性が五穀粉をもらって感謝した。

(写真提供・曾慈慧)



染者が急増していたインドでは、慈済とインド・カミロ修道会、カリタス基金会など長年現地で支援活動をしてきたNGO組織と協力して、多方面にわたって支

援を進めた。その過程で、慈済基金会執行長室に直属する「国連ワーキングチーム」は、国際的なプラットフォームを通じて、複数の組織の力を結集した。

曾慈慧師姐はワーキングチームの責任者として次のように述べた。「私たちは、慈済をカリタス基金会とカミロ修道会のネットワークにつなげ、互いに運営の方向性と目標、活動内容を理解するために、架け橋のような役割を果たしています。最も重要なのは、慈済ボランティアの日常的な地域社会での奉仕活動を、主流の国際プラットフォームを通じて、協力相手と積極的に共有することです」。

慈済国連ワーキングチームのメンバーは全部で十一人で、アメリカ、ドイツ、マレーシア、タイ、台湾の花蓮にいる。

その中で、二〇二〇年四月にチームに加入したばかりの涂君暉(トウー・ジュンホア)さんは、インドの支援プロジェクトを担当している。インドの五つの宗教組織グループと協力してコミュニケーションを取る過程で、彼女は、宗教間を越えた大愛と信仰の力を目の当たりにした。

最も涂さんの心に残ったのは、神の愛の宣教師会(Missionaries of Charity)のシスターたちとの交流である。シスターたちはハイテク製品をあまり使用しないため、二百人を超えた院内には、四台の携帯電話と十台に満たないパソコンがあるだけである。通信が不便で、ファッ



クスもないため、支援物資の通関手続きや通行許可書類などは、シスターたちが携帯電話で写真に撮って送るしかない。また、雨が降ると部屋が暗くなるため、晴れて太陽が出るのを待って、屋外で写真を撮らなくてはならない。連絡を取り合っている花蓮の涂さんはいつも、シスターたちの余りにも簡素な生活に胸を痛めている。

「修道院も支援が必要ではないかとシスターたちに聞きましたが、いつも『貧しい人が食べるものなら、私たちも食べます』という答えでした。そのように献身的な奉仕精神は実に仏教とよく似て

います。宗教は異なっても、無私の大愛と慈悲心は形となって現れるのです」。インドの多くの組織の聖職者とボランティアたちが梱包と発送をしてくれたお陰で、二〇二〇年十二月末までに、十萬世帯余りに支援物資が届けられた。

タイに滞在する非合法のために医療が受けられない難民が、長年行われて来た慈済の「タイ難民支援プロジェクト」によって、治療を受けることができるようになった。二〇一四年、タイのアメリカ大使館の難民支援チームは、慈済がマレーシアで行って来た難民に対する治療の成果を知り、難民に医療サービスを提

供できると期待して、タイの慈済ボランティアと連絡を取った。同じ頃、アメリカの慈済国連ワーキングチームのスタッフがアメリカ国務省と協力の覚え書きを交わし、共同プロジェクトを始めていた。タイ慈済ボランティアは医療チームを結成して、難民への施療と生活支援を提供し、既に延べ三万一千人余りの難民が恩恵を受けた。

●インドでの新型コロナウイルス感染症は深刻で、慈済は現地の宗教団体と連絡を取り、現地に行くことのできない慈済人の代わりに、インド・カミロ修道会、神の愛の宣教師会、チベット仏教寺院の協力を仰ぎ、共同で支援物資の配付を行った。

(写真提供・慈済花蓮本会)

世代交代、経験を伝承

「国連ワーキングチーム」は、慈済と外部の協力団体との架け橋となるシンクタンクのようなもので、国際的なプラットフォームやリソースがどこにあつて、どうやってそれらを申請するのかを慈済のコアチームに知らせている。「単独で行動するより多くのプロジェクト資金があれば、奉仕支援の項目も増え、より多くの人を助けることができます」と曾師姐は言う。

現在、慈済は既に十四の国際的なプラットフォームに参加しており、もしこれらのプラットフォームでより深く、広

く協同作業をしようとするなら、この目的を達成するために、より多くの有能な人材を集めなければならぬ。そこで、ロサンゼルスに定住している曾師姐は、コロナが猛威を振るう中、困難を乗り越えて台湾に戻り、慈済教育志業体と教育事項について話し合った。今までの経験を次世代に伝承し、より多くの若者に参加してもらいたいと考えたのである。

もし順調にいけば、「緊急災害訓練」と「リーダーの育成」の二つの課程を立ち上げる計画だ。国際作業プラットフォームに溶け込んだ、慈済の若いボランティア幹部らが、世界で慈済が行ってきた慈

善活動の軌跡を共有し、より多くの人が人道支援活動に参加するよう啓発することとで、慈悲の行動を途切れさせることなく、永続的に推進させたいと考えている。

ボランティア幹部の育成を通じて、「慈善訪問ケアを行う際に、国際的な主流プラットフォームでは何ができるのか」をボランティアに知ってもらい、「緊急災害支援を行う際に、どのようにして国際的な主流プラットフォームと繋げるか」によって、組織全体の運営過程をより効率化させることが曾さんの願いである。

将来を見据えて、国連ワーキングチームは、経験を伝承することに加えて、世界宗

教プラットフォームで慈済の精神と実践を推進し続け、積極的に国連信仰組織や他の団体と連絡を取り合い、互いに信頼できるパートナーを見つけないと考えている。

地球村になったこの時代では、さまざまな組織や異なる信仰グループが団結し、前向きなエネルギーを伝え、共通の認識と信頼、愛を持ってこそ、国境を越えて交流し、ネットワークを統合することができるのである。そして、愛を包容の行動に変え、善のさざ波を際限なくあらゆる所に広げることができれば、より多くの苦難に喘ぐ人々を支援できるのではないだろうか。(慈済月刊六五一期より)

生活は最高の良師

問

大学生の子供がアルバイトをしたいと言ってきました。他人の心は憶測しかねるから、簡単に信用してはいけなさと注意すべきでしょうか？

答：保護者である私たちは、子供が

将来、「正義感のある、善良で樂觀的で、明朗で」あってほしいと願うものです。しかし、現代の多元的な社会では、異なる環境の下に異なる習性を持った人がいます。私たちはいつまでも子供を側に置いて、一生守ってやることは不可能です。従って多くの問題を前もって告知するこ

とはできないのです。

子供がアルバイトをすうと言うのであれば、自主的に苦勞してみようとするのを喜んであげるべきです。アルバイトする重点の一つは学習することであり、親は子供と一緒に仕事の内容を理解すべきですが、職場環境の安全性、給料、保険などその他の事は一々注意を喚起する必

要はありません。さもないと子供が自発的に学んで成長するチャンスを剝奪してしまうことになります。それは、あたかも先生が授業中、生徒に「この部分が大変重要で、試験によく出るから赤いボールペンで印を付けなさい」というようなもので、学生たちはその部分だけを勉強し、内容全体の概念を理解しないのと同じです。それは、思弁と総括能力を抑制することになり、学習の妨げになるでしょう。

悪魔は細部に宿ると言われますが、子供が放課後に帰ってきた後、アルバイトで面白かった出来事や不愉快なこと、そして、それに対してどんな方法で立ち向かい、対処したかを話してくれるよう励

ますべきです。もし子供が処理方法を知らない時は、子供自身でもっと深く考え、人や物事と向き合うよう導くのです。直接、答えを言うべきではありません。というのは、人生の縁は常に予期しない時に会おうからです。

身をもって体験して答えを見付ける

ある日、生徒の小玉さんが、六時間目が終わったら校門の前で人を待ってもいいかと聞きました。誰ですか？どういうことですか？と尋ねました。小玉さんによると、「数日前、商店街で台中から遊びに来たと言う若い女の子に出合った

のですが、お金を全部使い果たしてしまい、食事も帰る切符も買えないので、五百元を貸してくれないかと聞かれたのです。私はちよんご五百元を持っていて、彼女が可哀そうに思えたので全部貸してあげました。そして今日、借りたお金を返しに校門の前まで来ると連絡がありました。互いに連絡が取れるようにと、私に携帯の番号を教えてくださいました」。

心の中では詐欺行為の一種だろうと思いましたが、子供を成長させ、人助けにも智慧が必要だということを学ばせようと、私は彼女が校門まで行くことを許しました。身の安全のために、その人が来なかったら直ぐ教室に戻り

子供に苦労させることを厭わない

「道」は歩いていかなければ、到達できません。もし人生で全てが順風満帆だったら、人は成長する必要がありません。彰化県師範大学特殊教育学部の張昇鵬（チャン・スンポン）教授は、長年、子育てに関する相談に答えてきた経験を持っている。「子供の将来は自らの手に掛かっているのです。従って子供に苦労させることを厭わず、学ぶチャンスを与えるべきです。子供の成長過程で経験することはどれもが学習の一種で、経験が問題解決の能力を養うのです」。

生活は最高の良師であり、挫折は最高

なさいと言いました。

七時間目の授業になっても、小玉は戻ってこなかったので心配になり、クラスで体の大きい男の子に頼んで、彼女を探しに行かせました。授業が終る頃、二人はやっと戻ってきました。

「なんとという詐欺師なの？あんなに綺麗に着飾って人からお金を騙し取るなんて。携帯は空番号、騙された！」と小玉は怒りをあらわにしました。

私はそんな結果になるだろうとは分かっていたのですが、社会には色々な人間がいて、善悪の判断ができ、そして再び問題に直面した時、正確に判断ができるようになるかを学ばせるために、子供自身に体験させなければならないと思ったのです。



の道場です。親愛なる保護者の皆さん、共に手放すことを学びましょう！

（慈済月刊六四一期より）

無数の足跡

証人となつて歴史に記すことは、私たちの世代の責任である。重要なのは、如何にして通り過ぎてきた無数の足跡の中に、一貫した精神の核心と動力を見出し、傳承していくかである。

◎文・盧憲馨（慈済大学宗教及び人文研究所教授） 訳・李曉萍（明浩）

毎年の年末に、證嚴法師から赤い封筒（福慧紅包と呼ばれるお年玉）を授かり、一面に揺れる灯火に囲まれて、立願し、天下に災難の起こらぬよう祈願するが、歳月が年輪の如く積み重なっていく。

毎年の行事なのに、不意に去年とは違う感じがした。私は以前のように

舞台上上がって手話劇に参加しなかった。舞台の下に座って「法海区」で手話をして周りを見ると、一回りも二回りも若い世代の同僚が何と多いことか。本当に年をとったと感じた。以前は名実ともに「師姐（スージェ）」と呼ばれる方のそばに座っていたが、今では昇格して、「師姑（スーグー）」（おばさん委員）になっていたのだ。

しかし、ホールの中段に座っていたおかげで、慈済（ツーチー）人が一堂に集まる様子を見渡すことができた。特に今年は初めて、志業体と花蓮地区のボランティア達が共催した。右側に目を向けると、列に並んで活気に満ちて整然と手話を披露している多くの白髪の師兄師姐（スーシジョン・スージェ）たちに、私は心から感服した。

二十数年前、「シリコンバレーお婆ちゃん」として知られたアメリカの慈範さんとは、台北支部の年末祝福会で会ったことを思い出した。そのシルバーヘアのお年寄りはいつもニコニコしていて、何度も振り返って「い



百の流れは海へと帰る

い儀式ですね！」と私に言った。法師が認証と赤い封筒を授ける姿、祈願灯を点灯する単純なものだったが、彼女は何回も見ているのに、興味津々に見ていた。

彼女は何を見ていたのだろうか？もしかしたら法師の慈悲の下に集まった無数の菩薩が放つ敬虔さや融和さが溢れる様子、または川の流れのように続く菩薩の列に、自分の心象風景を映して見ていたのかもしれない。彼女は英語を話せないが、北米のハイテクパークに慈濟の種をまくことができたのは、素朴で単純な心と彼女の篤行があったからである。気がつけばコンピュータエンジニアの若いグループまでが、彼女について慈濟に加わっていた。

以降の歳末祝福会は内容が更に豊富になり、参加者も数千人になった。その彼女はもういないが、今の隆盛な様子を見たら、目を大きく見開いて笑顔を浮かべているかもしれない。或いは別の感慨を持つだろうか？

人や物事は入れ替わり、「世代交代」というメッセージを静かに伝えている。斬新だった静思堂のフロアにはかつてどれだけの人が歩みを進めたことか。今では僅かにきしむ音を出している。歳月と共に徐々に背中が曲がっていく世代を後ろから追い越していく若者はいるだろうか？

年が明けると法師は、「慈濟教育研究センター」のオープニングセレモニーを主催するために慈濟大学に來られた。法師は懇ろに現在の人文社会学院は以前の慈濟中学校だったことを話し、記憶にある多くの出来事は皆の足跡と共にここに積み重なっているはずだが、初期の頃の足跡は薄れてしまったようだと言ひ、「皆さんはまだ覚えていてでしょうか、『あの年、あの事、あの人』を」と問いかけた。

証人として歴史に記すのは私たちの世代の責任である。大切なのは、どのようにして無数の足跡の中で、その一貫した精神の核と動力を見出し、伝承していくかである。（慈濟月刊六四一期より）



真心から出た言葉

◎文・釋徳仇／訳・濟運

常に感謝の気持ちを持ち、
無明の煩惱に付きまとわれず、
声を荒げて失態を晒すことがないよう
心掛けるべきです。

日々の第一歩

「毎日、晨語の講釈では、仏法で道を切り開き、皆さんが日々、菩薩道を歩むことに期待を寄せています。続いてボランティア朝会では、皆さんが諸々の出来事を報告し、大衆に奉仕する方向を確かなものにしていきます。道を順調に歩むには、一歩ずつ着実に歩み、方

向が逸れないようにしなければいけません」。三月一日の朝会で上人は、「日々の第一歩から方向が正しく、菩薩道を歩まなければなりません。世の災害が人類に鳴らしている警鐘を察知し、身・口・意を慎み、欲望のままに業を造ってはなりません」と皆を励ましました。

人類は口の欲望を満たすために、大量の原生林を伐採して牧場や養殖場に使っています。そして、利益を食うために地底や海底の資源を採掘し、水を保持する森林土壌と海洋の自然な生態を破壊しています。四大要素の不調和による災害は益々激しさを増し、危機が迫っています。上人は、人心の欲はとて深く、最終的にその被害は人類自身に跳ね返ってくる、と嘆いています。

「以前、人々はいつも、一家を養うために懸命に働いているのだ、と言っていました。家族に食べさせ、心配のない生活を与えるというのを全て否定するつもりはありません。人間は食べないと栄養は

摂れないからです。しかし、今の人は味や口の欲を追求し、大量の家畜を飼っています。毎日、殺される動物の数は膨大で、社会が乱れるほど殺生が行われ、人本来の善良な本性は既に見失われてしまっています」。

また、上人はこう言いました。「世界中に広がっている新型コロナウイルス感染症は人類に警鐘を鳴らす『大いなる教育』なのです。自分だけ平穩無事で運が良かったと言って同じような生活をしてはいけません。気候変動が急を告げていることを感じ取り、目覚め、これ以上際限のない欲望の追求をしてはならない、と悟るべきです。社会が平安で庶民が安心して暮らせることを望むなら、誰もが足ることを知り、常に感謝の気持ちを持って、和気藹々と生活することです。また、菜食することで齋戒し、衆生と共存すべきです。これこそが自らを救う道であり、災害を抑える最良の処方なのです」。

相手の長所を見る

三月二日上人は、精舎へ帰って尼僧たちと農耕生活を送っていた十数人の慈濟アメリカのボランティアに、縁を逃さず、深く法脈精神を理解するよう開示しました。「縁を大切にし、法縁者同士の感情を緊密なものにして、アメリカで綿密な菩薩ネットワークを作るのです」。

「精舎に帰って、法脈の精神を理解したいのであれば、自力更生することです。自分の力で生活すると同時に、奉仕する愛を啓発し、見返りを求めない奉仕をするようになるまで訓練する必要があります。そして、あらゆる事に対して感謝の気持ちを持ち、『感謝』が真心の言葉になるようになれば、修行の目的は達せられたと言えます。発心立願しても、実際に行動に移し、その志を長く不変のものにするには、

不動の心と意志の力が必要です。従って、あなたたちが常住尼僧たちを見て深く感動する理由は、彼女たちの発心した、その一念が全く変わっていないからです」。

「人は生活のために働かなければなりません。ただ、食べ物それほど多く必要とするわけではなく、発願すれば、余力で人助けができ、人助けすることは慧命を成長させます。あなたたちが家族の団らんを楽しむのは、世俗的な凡夫の人情と言えます。しかし、世俗的な凡夫は両親が自分を生んで養育してくれたことを当然のことに感じています。成長してからどうやって親の恩に報いるかに思い至る人は多くありません」。

「親子の関係だけでなく、人との関係もこの世で出会った縁を大切にしなければなりません。というのは、生活環境が異なり、考え方も異なるため、出会った時にはまだ意見の違いがあつたり物事の処理方法が異なつたりするため、ぎくしゃくした関係になるのは避けられません。もし、いつも誰それがどうのこうのと相手の欠点ばかりが目につけば、益々腹立たしくなります。これは他人の無明の煩惱を自分の中に取り入れることであり、正しく『人の過ちで自分を罰する』ことです。相手の過ちで、自分に対して大声を出した、などと考えれば考えるほど腹が立ってきて、自分の声にも棘が出てきます。

いつも嬉しくなるようなことを話し、相手の欠点も受け入れ、長所を見るようにして、単純な心を広く持つて常に感謝の気持ちを持つよう自分を訓練するのです。そうすれば、逆境に遭遇した時、直ぐに抜け出せ、無明の煩惱に纏わりつかれることもなく、声を荒げることでも失態を晒すこともありません。修行しようとするなら、恨みを抱かず、誰に対しても『感謝』すべきであり、それは絶えず自分に今までの悪習を改め、良い習慣を身につけるよう促していることでもあります。(慈濟月刊六五四期より)

六月の出来事

訳・済運

06・02	<p>◎台湾で新型コロナウイルスの感染が拡大し、全土に第三段階警戒体制が敷かれた。慈済基金会は各地の検疫所などにいる第一線の医療人員や警察、消防人員の防疫と体力補充のために、3万セットの防疫物資とジンスー食糧を内政部に提供した。</p> <p>◎ネパールで新型コロナウイルスの感染が拡大し続けている。慈済基金会は6月2日から21日まで順次、心電図機器と呼吸器及び防護服などの防疫物資をトリブバン大学教学病院とネパール国際菩薩寺沙弥学院、地域隔離センター、ネパール国立腎透析センターなどの機構に寄贈した。</p> <p>◎台湾で新型コロナウイルスの地域感染が発生し、各自治体は大量に迅速検査を始めたため、抗体試薬の供給が追いつかなくなった。慈済</p>
-------	---

06・04	<p>基金会は迅速検査の能力を上げるために、中研院が開発し、慈済大学が協力して試験が行われた「VTRUST新型コロナウイルス抗原迅速検査試薬」60万回分を各自治体と病院に届ける。本日、3万回分を台北市立連合病院、そして翌日に5万回分を新北市政府衛生局に届ける。</p> <p>◎インドではコロナの感染が猛威を振るっており、慈済基金会は引き続き医療物資の支援と貧困救済用の配付活動を行っている。6月に入ってから酸素製造機などの設備をカルナタカ州政府、アロギヤ基金会、デヴ・サンスクリテイ大学、世界仏教連盟などに寄贈した。また、カミロ修道会、ジオ基金会などの団体と協力して、ケララ州とタミルナドゥ州などで食糧の配付を行った。</p> <p>台湾でのコロナ禍は第3段階警戒体制に入り、全ての学校は「登校中止、勉学は続ける」措置を取った。慈済基金会は旅行関係のケイケイ</p>
-------	--

06・11	<p>慈済基金会と基隆市政府は共同で、7月と8月の夏休みの間、感染警戒体制期間中の学童の食事の心配をなくするため、2131の弱者世帯に月1回、「安心満腹宝箱」と「健康野菜ボックス」を届ける。本日、双方がオンラインで記者会見を行った。</p>
06・13	<p>台湾でコロナ禍が深刻になる中、政府は大規模なワクチン接種を始めた。慈済基金会は政府の措置に呼応して、新北市、彰化県、嘉義市、台南市、高雄市、屏東市、花蓮県、台東市などにある静思堂及び支部を自治体衛生局指定の接種会場に貸し出す。中でも、慈済台南善化支部は本日から、そして、その他も順次運用を開始する。また、</p>

06・07	<p>慈済基金会は今年、ラオスに二回目の防疫物資支援を行った。10万個のマスクと5400個のフェースシールドが本日、チャンパサック県の衛生署に到着した。</p>
06・08	<p>台湾のコロナ禍は深刻で、医療物資のニーズが高い。慈済基金会は310台の酸素製造機を感染が最も深刻な台北市と新北市を主な寄贈対象にした。本日、30台を新北市衛生局、そして20台を台北市衛生局に届けた。</p>
06・09	<p>台湾のコロナ禍が深刻になり、慈済アメリカのダラス支部はテキサス</p>

	06・23	<p>当国衛生部長のワニアラチ (Pavithra Wanniarachchi) 氏らが代表で受け取った。</p> <p>慈済基金会は、台湾のコロナ禍を緩和する手伝いとして、500万回分のファイザー (BNT) ワクチンの購入計画を発表した。本日、顔博文執行長が代表で衛生福利部食品薬物管理署に文書を手渡した。</p> <p>慈済基金会は台湾のコロナ禍支援活動で、医療検査機器や防疫物資を寄贈すると共に、貧困者支援を行っている。これまで寄贈したものは、酸素製造機100台と呼吸補助器10台、迅速抗体試薬22万回分、マスク及びフェースシールド140万個超を寄贈した。その他、安心生活ボックス14073箱、安心祝福パック14800個、エコ毛布、防疫物資パック、WIFIルーターなど合計34万件に達する。</p>
06・25		

	<p>会場ではジンスー豆乳粉と缶入り福慧珍粥を接種に来た民衆に配付すると共に、水分補給を十分に行って、接種後の体調の変化に留意するよう呼びかけた。</p> <p>2015年5月に工事が始まったインドネシア慈済病院が6年を経て、開業することになり、14日に試験的に運用した。先ず、病院裏手の駐車場9階にある新型コロナウイルス感染症防疫センターから運用を開始した。そこには隔離区域、専用手術室、医学検査設備などと56の病床がある。15日夜、初めて帝王切開による出産手術が行われ、新型コロナウイルスに感染した妊婦から双子の赤ちゃんが生まれた。</p> <p>スリランカの新型コロナウイルス感染者数が4月中旬から急増し、医療が逼迫した。慈済基金会は100台の台湾製酸素製造機と500台の血中酸素測定器、2千本の経鼻チューブを寄贈した。本日、</p>	
06・14		
06・16		

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2021年7月20日発行・295号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)

夕べに届く真心の祈願



「仏誕節、母の日、慈濟の日」三節一体の灌仏会が、5月9日午前7時、花蓮靜思堂の前の広場で、靜思精舎の尼僧、慈濟ボランティア及び慈濟志業体代表によって催され、台北の臨濟護国禪寺と萬華龍山寺の会場ともオンラインで繋がり、その様子が世界中に実況放送された。人々は敬虔な心で、台湾の干ばつ終息と世の疫病終息及び災害のない世の中を願って祈った。(文・陳誼謙 撮影・徐政裕 台湾花蓮 2021年5月9日)

